

# リード芦屋新聞

発行元  
立市立  
市活一  
民活タ  
センター  
リードあしや  
記事  
立市立  
兵庫県  
芦屋高  
等学校

## 社会での活用、実感

### 高島市長、休学で見えた研究の意味

高島峻輔・芦屋市長のインタビュー、最終回となる第4弾は、米国での学生生活や若い世代へのメッセージを聞いた。

◇ —大学生のころにやってみて、よかったと思うことは何でしょうか。

「休学したことかなと思っています。アメリカの大学に進学して、最初の2年が終わった後に1年半、休学をしました。自分が当時、勉強していた環境やエネルギーの研究が、実際の社会ではどんなふうに生かされているか、見てみたくなったんです。たとえば再



生可能エネルギーが、ヨーロッパやアメリカで、どんなふうに使われているのか。現場で対話を重ねるこ

とで、自分が勉強してることが、ちゃんと社会に繋がっているんだっていうのを初めて実感できました」

「見て回っていて『ああ、これ授業でやったなあ』みたいな思ったり、逆に帰ってきた後に授業で『ああ、これはドイツで見ただよつた』と思いつたり。先生から黒板の前で教えてもらっていることが、実際に現場でやっていることと繋がったのは、勉強のモチベーションにもなったし、休学の決断をしてすごく良かったなと思つています」

## 好きなことを真剣に 突き詰めたものは大きな財産



—中高生に向けてメッセージをお願いします。

「好きなことを、ぜひちゃんとやってみてください。本当に好きなことで、も、ちゃんとやるのは実はなかなか難しい。ダラダラとやるのは、誰でも得意なのですが。たとえば漫画が好きなら、単に読むだけでなく、さまざまなことを考察しながら読んでみる。好きなことをちゃんとやる、とても大きな財産にな

ると思います」

「これは、自分がアメリカに行つて感じたことでもあり、自分の子どもにできるたたらよかつたと思うことでもあります。たとえば言葉が伝わらなくても、自分が自信を持つてやつてきたことが一つでもあれば、みんながそれに興味を持つてくれます。好きなことを真剣に。応援しています」（写真は本紙記者との撮影に応じ、笑顔の高島市長）

## リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

記事

谷村京美

写真

岩城真優

## 地域を大切に

## A型事業所を運営、鍋島奈穂子さん

芦屋市公光町で、就労継続支援A型事業所「ワークキューブ」を運営している株式会社プランツ・キューブ代表取締役社長の鍋島奈穂子さんに話を聞いた。

プランツ・キューブは職業訓練校から始まっている。その当時あった「園芸コース」と「人を育てる」から「プランツ」、多面体のように多様な方向から考えていくという点で「キューブ」、それらを組み合わせるこの会社の名前がついた。

芦屋で活動を始めた理由については「長く住んでいるというのがあります、



地域の中で何もできないのに外に出て何かすることができたらと思うので。地域を大事にして

「いきたくないです」と話す。就労継続支援A型事業所のため、「雇用契約をして働いている人には給料が支払

われる。「やりたい仕事とできる仕事は違い、給料を支払うのに適した力を持っているかなども見えないといけない」と、福祉サービスと雇用契約を合わせる難しさも語る。

その先の自分の能力に合った一般就労に向けて働くというのが第一の目標である。一方で、働く目的によっては、定年までワークキューブで働くという選択肢もあるなど、一人一人を尊重した形を取る。

## 利用者への思い

個性を活かして生き生きと



今回のインタビュー中、実際に仕事をしているところを見せてもらった。パソコンを使ったデータ処理や、ハンドメイド文具の製作など、一人一人の得意なこと・得意なことに合った作業をしていた。鍋島さんは、作ることで終わらずに、グッズ販売のワークショップなどを通して様々な人とコミュニケーションを取れるようにする機会を作っていた。

この仕事をしていてやりがいを感じることは何かという質問に対して鍋島さんは、「個性をどう活かしていくか、どうすれば利用者さんに負担がかからないか、なおかつ仕事として計画性を持たせられるのか。考えていくのは大変ですが、ここに入る前とは違う生き生きした表情を見られたとき、この仕事をしていて良かったと感じます」と笑顔で答えた。

## リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

記事  
岩城真優写真  
天野うの

## 自分の願いを実現

## 女性が抱える問題に寄り添う森本さん

特定非営利活動法人、夢コネクト代表の森本紀子（もりもと・のりこ）さんにインタビューを行いました。

森本さんは、女性が自分の願いを実現するためのサポートをしています。具体的には、さまざまな地域を訪問して、女性のための働き方セミナーなどたくさんのセミナーを行い、現代の女性が抱える問題に耳を傾けています。

みなさんは女性に関するさまざまな問題と聞いて、なにを思い浮かべるでしょうか。森本さんは「育児と仕事の両立もそうですが、

産休や育休からの仕事復帰といった仕事のことだけでなく、家事や育児などは女性がするものという古い固

定概念がまだ残り、両立や育児での悩みは女性のほうがたくさん抱えているように思います」と話しまし



た。

10月1日には「ゆるくい、ママと子どものための子育て会議」というイベントも行われ、そこでは参加者たちがさまざまな子育ての困りごとを共有しました。

また、森本さんは今後の活動として、子育てでの困りごとを支援できるよう、まずは当事者や支援したい思いがある人たちとの情報共有の場づくりを計画しているそうです。

## 個性を大切に接する

子どもたちの成長を間近で



「放課後や長期休みの居場所をくつろぎの場、成長できる場にしたい」と森本さんは思い、子どもコミュニティキッズコムを2011年に立ち上げました。キッズコムでは子どもたちと関わる機会が多い中、森本さんが子どもたちの接し方で気をつけていることを聞くと「不公平をなくすこ

それぞれに合う接し方を」と教えてくれました。特に小学生は敏感で、些細なことでも傷ついてしまうため気を配るよう心掛けています。最後に森本さんは「キッズコムで働いていると子どもたちの小さな成長から大きな成長を肌で感じる事ができるのが嬉しいし、スタッフ全員、子どもたちを愛しているのがうちの自慢です」と話しました。

# リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

記事本末

写真真優

岩城眞優

## 人と人をつなげる

芦屋市子ども福祉部こども家庭室(愛称・あしふセンター)の廣瀬香センター長

に、このセンターの活動についてインタビューした。

高年齢者まで、市民の健康づくりを推進するため、いろいろな保健・福祉サービスを行なっています。保健だ

けでなく、児童福祉を統合させたグループとして、多くの人のに向けた活動を行いたいと思っています。国の政策では、来年度から「こども家庭センター」の活動を全国的に進めようとしています。しかし、芦屋市は今年から先行して設置されました。このセンターは活動を始めたばかりで、まだ骨格が決まっています。だからこそ、いろいろな新しい企画に取り組んでいきたいと思っています。



## こども家庭・保健センター

### 親子で楽しめる内容に

#### 多彩なイベントを開催

核家族が多くなり、こどもの遊び方がわからないという悩みをよく聞きます。そのため、イベントの

内容を、できるだけ家でもできることにして、家でも親子でやってほしいと思っています。

こどもの興味を引くために、多くのイベントを開催しています。いろいろなイベントをすることで、一つ

でもこどもの興味があるイベントを見つけてもらいたいと思っています。

「あしもん」というキャラクターが児童虐待防止活動を行っています。多くの人に児童虐待防止を知ってもらうためにきっかけになります。



です。そのため、こどもたちの意思を尊重しながら活動していきたいと思っています。こどもの虐待は、親が虐待をしたいと思ってやっているケースは、とても少ないです。こどもをとてもかわいいと思っていても、ストレスがたまるとし

て、虐待をしてしまうのが実情です。保護者に寄り添った活動を行ってほしいと思っています。

ここでは、乳幼児と親が関わる少人数のイベントを多く行っています。少人数で行うことで、親が相談しやすいかたり、職員が話しかけやすかったり、親同士

をつなげられるメリットがあります。そして、目が届きやすいので親御さんもスタップも安心できます。継続的に参加してくれる人が多いのは、赤ちゃんの足にインクをつけ、紙につける足型アートのイベントです。このイベントでは季節に合わせて、いろいろなイラストのシートを製作します。紙におした足型に、目やひげ、しっぽを付けて、毎回楽しんでいただいています。

### 市民の「交流の場」 中高生にも参加促す

このセンターは、全世代が使える場所となっていますが、中高生対象のイベントは多くはありません。コロナ前のイベントでは、ボランティアとして地域の中高生に手伝ってもらい、とても盛り上がりがありました。高校生のボランティアなどの活動は徐々に増えてきていますが、まだコロナ前には戻っていません。

この場でも中学生、高校生は部活がなくなってしまう、学校外の人とふれあう時間がなくなってしまう。また中学校では私立と公立でわかれ、学校の中でしか交流することがなくなり、市外の学校に行く人が多く、夜、芦屋に帰ってくるだけになってしまうのが現状です。これからは、さまざまな人たちが交流できる場を増やしていきたいと思っています。